

大神高市麻呂の復権

——その背景としての文武朝——

土佐 秀里

はじめに

大神（大三輪）高市麻呂は、持統天皇に対して伊勢行幸を中止すべきであると諫言した人物として歴史上にその名をとどめてゐる。しばしば独裁者的と評されてきたかの女帝に反抗したほとんど唯一の人間であるというその一点だけが注目されることの多い高市麻呂であるが、また同時に、『懷風藻』序文が歴代の代表詩人のひとりに名を挙げる漢詩人でもあり、『万葉集』にも彼の作に擬せられる歌があり、文学者としての一面もあることを忘れてはならない。さらに、『懷風藻』には高市麻呂の人徳を慕う後人の詩があり、『日本書紀』には彼を忠臣の鑑として讀める説話もあつて、高市麻呂が文学創作であるのみならず自身が文学化される対象ともなつていったことが知られる。つまり、文学史の観点からも、この大神高市麻呂ははなはだ興味深い存在と言えるわけである。

そこで本稿では、創作者でもあり作品の題材でもあるこの人物

に焦点をあてて、彼をとりまく文学作品の形成過程やその特質などを明らかにしていこうと考えるが、ここで注意される点は、高市麻呂関連の文学作品はすべて行幸諫止事件以後の作であり、しかもその一件による挫折の経験がそれらの作品に必ず影をおとしているということである。文学世界における高市麻呂にとつても、やはり行幸諫止という出来事が大きなメルクマールとなつてゐるのである。そして高市麻呂が文学の世界で名誉を手にしてゆく過程は、そのまま行幸諫止という行動が再評価されてゆく過程であつたと言つてよい。

文学もひとつの制度であり、時代環境にそのあり方を決定される。大神高市麻呂をめぐる漢詩・和歌・説話の中に、それらを形成した時代の精神を読みとつてみようと思う。

一 空白の十年

大神高市麻呂の人生のターニング・ポイントとなつた伊勢行幸諫止事件が起きたのは持統六（六九二）年二月から三月にかけて

のことである。

『日本書紀』によれば、二月十一日、持統天皇は「来る三月三日、伊勢行幸に出発する」と詔を發したところ、その日のうちに中納言の（大）三輪高市麻呂は上表して行幸中止を諫言したという。翌月、出發予定日の三日になって、高市麻呂は「其の冠位を脱きて、朝に攀上げて」重ねての諫言を行ったが、天皇は聞き入れず、三月六日、ついに伊勢国へと旅立った。

この一件の後、高市麻呂の名は十年間にわたって正史に見えない。その名が再び登場するのは大宝二（七〇二）年のことである。『統日本紀』同年正月十七日条の任官記事中に「從四位上大神朝臣高市麻呂を長門守」に任じたと見える。持統六年に「中納言」であつた高市麻呂が、大宝二年に「長門守」に任ぜられるまでの間、どのような立場にあつたのかということが、まず最初に問題となろう。

持統紀には「冠位を脱きて」諫めたとあり、また後述する藤原万里の詩には「辞榮去」「遂辞官」とあつて、持統六年に「事件の結果、官を辞したものと思われる」という推測が妥当であるが、なおそれに反する意見もないではない。『公卿補任』が持統六年以後も、大宝元年三月までひきつづき中納言職にあり続けたとしてゐるのは論外としても、「大宝二年に從四位上に上つてゐることは、それまですでに相當の官職を経てゐることを示す」とする歴史学の泰斗の意見もあるので、くだくだしくなるが、この点について検討しておくことにする。

問題を多少複雑にしている要因のひとつに、ちょうどこの時期

に位階制度の変更がおこなわれたということがある。天武十四（六八六）年制定の冠位六十階制が、大宝律令の制定に伴い新位階制へと移行し、同時に官位相當の制も確立される。持統六年時の高市麻呂の官職は「中納言」であり冠位は「直大貳」であつた。律令施行後の大宝二年には「從四位上」で「長門守」となつたが、ここにどれだけの格差があるのが問題である。

位階について見ると、「直大貳」と「從四位上」は同等であり、そのまま移行しているということになる。官職については、持統朝の中納言というのは実体が不明の点もあるが、高官であることは間違いない。律令官制では從三位に相當する。一方の長門守であるが、国司は五位・六位相當の官職であり、長門国は「延喜式」によれば中国であつて、その国の守は正六位下に相當する。尤も、天武五年正月の詔に「凡そ国司を任せむことは、幾内及び陸奥・長門国を除きて、以外は皆大山位より以下の人を任せよ」とあることから「長門守は重職だつた」とする見方もある。西の衡りを固めるという意図であろうが、それにしても大宰帥ほどの重職ではあるまい。また天武五年と大宝二年ではかなりの懸隔があり、対外情勢も大きく変化してきている。よし長門守が重要視されていたにせよ、せいぜい大国の守（從五位上相當）程度の官職だつたと見るべきではないだろうか。高市麻呂以後の事例を求めると、和銅元（七〇八）年三月に從五位上の者（引田尔閑）が長門守に任ぜられている。少くとも、地方任官の国司が中納言より下位の官職であることはたしかであらう。

そもそも高市麻呂が持統朝において中納言という高官に就いて

いたのは、彼が壬申の乱における大海人¹天武方の功勞者であつたからである。壬申紀には高市麻呂の名が二度見えているが、大和での闘いで近江軍を「大破」したと記されており、その活躍ぶりがうかがえる。乱平定後は天武朝廷において順調に出世していったものと思われ、天武崩御後の殯宮儀礼において高市麻呂は「理官」(治部省)を代表して誄を奏上している。治部卿に相当する地位にあつたことであろう。この時、高市麻呂と並んで官省代表として誄を奏している者はみな壬申の乱の功臣であるが、彼らのその後の官位昇進を高市麻呂と較べてみれば、その差は歴然としている。太政官代表の布勢(阿部)御主人はこの時直大參の位であつたが、その後、持統五年には直大弔、同八年には正広肆、そして大宝元年までには正広參で大納言に登り、同年三月、位階改訂に伴い従二位となり、さらに右大臣に任ぜられた。

また法官(式部省)を代表して誄を奏した石上麻呂は直広參であつたが、持統十年には直広弔、大宝元年までに直大弔で中納言となり、同年三月に正三位で大納言に任ぜられている。天武殯宮の時に直大肆で彼らと肩を並べていた高市麻呂が、大宝二年の段階でまだ従四位上で長門守というのは明らかに異常なことである。「相当の官職を経ている」などとはどうてい言えないだろう。持統六年から十年間、実質的に位階が据え置かれたままであつたという事実の背後には、やはり特殊な事情が存したと考えるべきである。

藤原万里の詩に言うごとく、高市麻呂は持統六年に官を辞したのであろう。官職の中納言は辞しても、冠位は剝奪されることが

なかつたので、そのまま従四位上となつたのだと考えられる。つまり持統六年以降の十年間は、のちの散位のような状態におかれていたのではないかと考えることができるのである。散位が制度として確立するのは大宝律令が制定され官位相当制が確立してからのことになるが、それ以前にも位のみあつて官を有さぬ者は少なからず存在したと見られ、冠位³のおかげでかなりの経済的恩恵を受けていたようである。高市麻呂も、そのようにして不遇の十年を過ごしていたものと推測される。

このように考えてみると、大宝二年の長門守就任は高市麻呂にとつて久々に手にした官職であり、彼の政界復帰の第一歩であつたと見るべきである。この時の任官記事を見ると高市麻呂は四位であるにもかかわらず五位と六位の間にその名が記されているのだが、五位の者がより上級の官職(左京大夫など)に任ぜられていることからみても、高市麻呂の長門守任官は例外的なものであつて、十年振りの現職復帰という事態ゆえに位階よりもやや低めの官職にとりあえず就かせたという事情だつたのではないか。翌大宝三年六月に高市麻呂は従四位上のまま左京大夫に任ぜられているが、機会を見て地方から都へ呼び戻し、かつ左京大夫(従四位下相当)というより位階に相應しい官職に就けようとした配慮があつたのだろう。

その後高市麻呂は慶雲三(七〇六)年二月六日に、従四位上で左京大夫のまま卒している。「壬申年功」によつて従三位を追贈されたというが、彼が辞官することなく中央政界にとどまり続けていたなら、とつくに手にしていたはずの位階である。「統日本

紀」に卒年の記載はないが、『懷風藻』によれば享年五十歳であつたという。

以上の検討から高市麻呂の官職辞任はほぼ確実なものになつたと言ひ得るが、次なる問題は、高市麻呂の復職および再評価の過程がいかなるものであつたか、ということになつてこよう。以下、高市麻呂自身の作品とその周辺の作品から、復権の背景を探つてみることにする。

二 復権する高市麻呂

『万葉集』巻九相聞に次のような歌が載せられている。

大神大夫任長門守時、集三輪河辺宴歌一首

三諸の神のおぼせる泊瀬河水尾し断えずは吾忘れめや

(9—1770)

おくれ居て吾はや恋ひむ春霞たなびく山を君が越え去なば

(2771)

右二首古集中出

「長門守」に任ぜられた「大神大夫」とは高市麻呂にはかならない。即ちこの二首は大宝二年春の作である。任官に伴う離別の歌は珍しくないし、その多くは送別の宴の席上で詠作されたものであつたろうが、右の歌のように題詞に宴席歌である旨をことさら注記した離別歌は珍しい。集中の宴席歌は作者・時代・表現等に一定の傾向があり、歌が宴席で作られるのはごく一般的事であるにもかかわらずわざわざそれを明記する場合は、そこに何らかの意図がはたらいていゝと言へるだらう。右の歌の場合

も、別離という主題や表現上の相聞性よりも、宴という歌の場に巻九編者の関心や重点が置かれてゐると見ることができなのではないだらうか。前節に見たように高市麻呂の長門守任官には特別な意味があつた。決して恵まれた官職とは言えないが、この再就職は高市麻呂の行動に対する公的な再評価という意味があるのだから、高市麻呂にとつては喜ばしく、かつ感慨深い人事であつたはずである。宴が三輪川のほとりで開かれ、「三諸の神」が歌われているあたりは、この集いが三輪氏一族による、大いに氏族意識を昂揚させた壮行会であつたことを想像させる。

歌の表現も、別離を主題にしながら悲愴感や哀切感はほとんど感じさせず、一首目の男の立場の歌は氏神によつて保証される永遠性を歌い、二首目の女の立場の歌は新しい季節の到来を告げる「春霞」を歌つてどこかおだやかな暖かみを感じさせ、どちらも明るさがある。古賀精一氏は一七七〇番歌を評して「地方長官として再出発するにあたつての、大神朝臣としての自負の感じられる強い歌」と述べているが、従うべき見解である。この二首が高市麻呂個人の作であるかどうかは判然としないが、集団の作と見ても、同族意識につらぬかれた連帯感と共感によつて醸成されてゐるという点で、高市麻呂の心情そのものが歌われていると理解して何ら支障はない。

『万葉集』の高市麻呂関連の歌は祝宴の歌であり、長門守任官が記念すべき政界復帰であつたことを示してゐると言へる。言わば高市麻呂の復権が隠された主題であつたのである。

復権という主題は、『懷風藻』におさめる高市麻呂の漢詩に、

いつそう鮮明に呈示されている。

「從駕應詔」 大神朝臣高市麻呂

臥病已白髮 病に臥して已に白髮

意謂入黃塵 意に謂へらく黃塵に入らむと

不期逐恩詔 不期に恩詔を逐ひ

從駕上林春 駕に従ふ上林の春

松巖鳴泉落 松巖鳴泉落ち

竹浦笑花新 竹浦笑花新し

臣是先進輩 臣は是れ先進の輩

濫陪後車賓 濫りて陪る後車の賓 (懷一八)

この詩は漢中の應詔詩としてはきわめて異色の作である。「應詔」という詩題は「文選」など六朝詩に典拠があり、「詔」の字は天子の命令を意味したので、その主題と表現は必然的に天子を讚美することへと収斂していった。それを模倣撰取した日本においても「詔」の用字は六国史等において天皇の発話に専用されており、「懷風藻」の「應詔」詩は天皇の命令に應えて、天皇に対して奏上されるものであつたはずである。従つてその主意は「絶対権力者天皇を讚美したり、朝廷や国家を祝頌、謳歌するということ」になければならず、「そこでは侍臣が自由に潑刺として自身的情感を吐露する詩を作るわけにはゆかない」のは当然だろう。ところが右の高市麻呂の詩は「應詔」詩でありながら、きわめて個人的な心情を吐露するところから叙述をはじめている。しかもその表現は「病に臥して」とか「黃塵に入らむ」といったことさらに不吉で禍々しいものであり、「從駕應詔」という場の華やか

さとはあまりにかけ離れている。むしろ陰慘な私情は、有難き「恩詔」によつて救い上げられることになり、行幸の情景も自らの境遇とは対照的な明るく晴れがましいものとして描かれているので、天皇讚美という「應詔」詩たるべき枠組みは一応保たれてはいる。しかし、漢中の他の「應詔」詩と比較してみればただちに気付くように、対比的にもせよ自身の不遇に言及し、私的な心情を開陳するという表現は全くの異例に属する。その異例さゆえに、この詩に対して「猶諷諭の意を含む」(林鶯峯「本朝一人一首」巻二)と見たり、「痛烈な語氣」とか「慷慨の詩」といった評価を与える視点も生じてきたのであらう。日本漢詩において個人的な境遇や不遇感を公的な場で述べるという傾向が見られるようになるのは、平安中期以後のことだと言われているが、あるいは高市麻呂の詩はそのきわだつて早い先蹤ということになるうか。何れにせよ高市麻呂詩の表現は特異であり、問題は、その特異な表現が何故為され、何故許容され、何故「應詔」詩たり得たか、ということにある。平安中期以後、公宴詩における述懐が許容されていく背景には、詩文の才を重んじ、人事の公正をはかうとする天皇側の積極的承認があつたと見られるが、高市麻呂詩の場合も「應詔」詩であるからには、個人的述懐を許容し理解する前提が天皇——言うまでもなく文武天皇——の側にあつたと見るべきではないだろうか。高市麻呂もそのことを承知の上で作詩したからこそ敢えて私的感興を以て「詔」に應えたのであらう。即ち高市麻呂詩の特異性とは彼に下された「詔」の特異性であつたと考へるべきなのである。「不期」の「恩詔」とは高市麻呂にとって

単なる行幸従駕の命令ではなかった。天皇に対する直言によって官を失った彼にとってそれは名譽回復そのものを意味していた。文武天皇は、過去の人として忘れられつつあった高市麻呂に復権の機会を与えたのである。

この詩の成立時期を特定することは難しいが、これまでに慶雲二年三月の倉橋行幸時とする説が出されている。⁽¹¹⁾しかし詩の表現をすなおに受け取るなら、大宝二年の復職以前の作と見た方がよいのではないだろうか。「官職を辞してゐた時の作」⁽¹²⁾と見る方が「不期」の語が活きてくる。慶雲二年では復権の感激も薄れていようし、左京大夫という官職ならば行幸に従駕するのは当然であつて(『延喜式』左右京職など)予想外でも何でもない。『続日本紀』に記録された範圍内で指定するなら大宝元年二月の吉野行幸時というのがよりふさわしいのではないかと思われるが、この点については稿を改めて詳論したい。ともかく、この詩の制作された行幸は高市麻呂の政界復帰直前の時期に行われたものではないかと推定され、おそらく高市麻呂を従駕させたことがその本格的復権のための布石であつたと想像されるのである。

このように、高市麻呂自身(あるいはその近親者)の作品を検討してみると、それらは全て文武朝の作であり、かつその政界復帰を契機として作られており、そして主題が彼の復権という事態そのものにおかれていたということが確認できる。このような作品群が文武朝という時代に成立し得た背景と、高市麻呂の復権が文武朝に実現可能となつた背景とは同質のものであり、そこにはひとつの時代精神とでもいふべきものが存在していたと考えられ

る。次いで高市麻呂をめぐる後代の言説を検討することで、その背景にある精神性をより明確にしてみることにはしたい。

三 高市麻呂を説話化したもの

大神高市麻呂はその死後も語り継がれ、説話の主人公として文学作品のなかに生きつづけた人物であつた。しかもその物語化され伝説化される中心的主題は、やはり行幸諫止という歴史的な事件におかれていた。そしてそこではつねに高市麻呂の行動と精神は倫理的に正しいものとして肯定的に評価されていたのである。

『懷風藻』におさめる藤原万里(麻呂)の詩「遇神納言墟」は、高市麻呂没後の再評価の言説として最も初期のものであり、既に高市麻呂を伝説化する一定の方向性が見えているという点で注目される。

「神納言が墟を過ぐ」 藤原朝臣万里

一旦辞榮去 一旦榮を辭びて去りぬ

千年奉諫余 千年諫を奉りし余に

松竹含春彩 松竹春彩を含み

容暉寂旧墟 容暉旧墟に寂し

清夜琴樽罷 清夜琴樽罷み

傾門車馬疎 傾門車馬疎し

普天皆帝國 普天は皆帝の国

吾帰遂焉如 吾帰きて遂に焉くにか如かむ

(懷九五)

君道誰云易 君道誰か易きと云ふ

臣義本自難 臣義本自り難し
奉規終不用 規を奉りて終に用ゐらえず
帰去遂辞官 帰り去にて遂に官を辞りぬ

放曠遊楚竹 放曠楚竹に遊び
沈吟佩楚蘭 沈吟楚蘭を佩ぶ

天關若一啓 天關若し一たび啓かば

將得水魚歎 將に水魚の歎を得む (懷九六)

この詩は「神納言」すなわち高市麻呂の旧居を作者が通りかかつての感慨と追憶の念をうたつたものである。といつても作者万里は「公卿補任」の寛年記載によれば持統九(六九五)年の生まれということになり、生前の高市麻呂との直接的交渉はほとんどなかつたと考えられる。つまりこの詩の内容は伝聞にもとづくものであつて作者の個人的な経験や独自の判断にもとづくものではないと見られるから、この詩が成立する前提として既に高市麻呂に対する一定の評価が定まつていたということが推定できる。

その評価とは、一言でいえば、高市麻呂こそが「忠臣」であるというものである。万里の詩は高市麻呂晩年の復権の経緯には一切ふれずに「辞官」の時点にのみ焦点をあてているが、その表現は悲劇性を強調するものではなく、これを「君道」と「臣義」の問題に還元しようとしている。諫言という困難かつ勇氣ある行動こそが「臣義」のあらわれであり、それが正当に評価されること、が理想的な君臣関係だというのがこの詩の主張であらう。第一首・第二首ともに尾聯は、それぞれ「帝国」「天關」の語を用いて、主君の側の理解を求める表現になっている。つまり万里詩の

認識においては高市麻呂の行動は絶対的に正しいのであり、これを認めるか否かに天皇の統治者としての資格と有徳性とがかつていふことになる。換言すれば、天皇の意志・行為が絶対的規準ではなくて、その行為如何によつて天皇の有資格性が問われるという、古代王権の論理とは異なる新しい天皇観がここには示されているといつてよい。諫言が評価されるというのはそういうことにほかならない。そして、このような考え方は儒教的理念の投影であると見てよいだらう。

こうした評価の方向性をさらに押し進めたのが「日本靈異記」の高市麻呂説話であるといえる。「靈異記」上巻第二十五縁「忠臣欲小なく足るを知りて諸天に感ぜられ、報を得て奇事を示す縁」は、高市麻呂を主人公とし、伊勢行幸諫止事件を中心に説話化したものであるが、ここでは高市麻呂ははつきりと「忠臣」と規定され、「忠信之至、德儀之大」とか「忠而有仁、潔以無濁」といった語によつて徹底的に讃美されている。いうまでもなく「日本靈異記」は仏教説話集であるが、この上巻二十五縁には儒教的な意識が濃厚にあらわれていることはしばしば指摘がなされてきている。⁽¹³⁾

この靈異記の説話が描く高市麻呂の像は、先の藤原万里の漢詩が描こうとする高市麻呂像には重なるものであり、ともに高市麻呂を理想的「忠臣」として理解し造型している。これは高市麻呂没後の、奈良朝期における、大神高市麻呂という人物とその行幸諫止事件に対する評価の一般的傾向を示しているといつてよいであらう。そしてその評価軸は儒教的理念によつて形成されてい

たと考えられる。

実際に持統六年のその時に大神高市麻呂の行動を支えていたものが儒教的な理念そのものであったのかどうかはわからない。「從駕應詔」詩の中に「先進」という「論語」出典の語が用いられていることなどからすれば高市麻呂が儒教に無知であったとは考えられないが、しかし彼が伊勢行幸を阻止しようとした動機のうち、伊勢神宮祭祀に対抗しようとする三輪山祭祀者としての大三輪氏の氏族意識とエゴイズムが全くなかったとも言い切れないであろう。また、持統天皇が伊勢行幸を強行した背景にも、単に女帝の専横とか奢侈ということでは片附かぬ政治的な配慮や意図が存した可能性もある⁽¹⁵⁾。だが、事実はどうあれ、ここではこの歴史的事件が説話化され享受されてゆく過程において、そこに儒教的な解釈が付加されていったという点が重要なのである。そして、文武朝における高市麻呂の復権という事実にも、そうした儒教的解釈が影響したのだと考えられる。奈良朝における高市麻呂肯定の言説の起点は文武朝にあったと見るべきである。

漢籍において諫言という行為は臣下の者のとるべき正しい行動として奨励され正当化されてきた。「藝文類聚」にも「諫」の項目があり、飛鳥奈良時代の官人がそれを目にする機会も少なからずあったであろう。持統紀六年の高市麻呂諫争の記事の表現が「藝文類聚」「諫」所引の「漢書」の表現に類似していることは既に指摘がある⁽¹⁶⁾。その他にも、律令官人必須の教養とされた儒家の經典類の中にも諫言を正当化する記述はしばしば見られる。たとえば「孟子」の「離婁章句下」に「諫」の語が見える一節があ

る。この一節は君臣間にも礼のあるべきことを説いたもので、「諫行はれ言聴かれ」てはじめて臣は君に対して忠節を全うできるという主旨を述べている。また經典類とは異なるが、諫言について詳しく述べたものに漢代成立の「說苑」がある。「說苑」卷二・臣術には忠臣だけがとりうる行いとして諫・諍・輔・弼の四つを挙げ、これを受けいれ尊重できる者が明君であり、これを憎み退ける者は闇君であると述べられている。同書卷九・正諫ではさらに詳しく諫言について説き、そこには孔子の言として諫言を奨励する文言を記している。「說苑」が引く孔子のことばの典拠は不確かであり、おそらくは通俗的な書物から採ったものであろうが、しかしこうした「孔子家語」などに集成されていくような亜流の孔子語録もまた孔子の言説として流通し享受されていったことはたしかである。こうした漢籍類によって、諫言は広く儒教的理念としてとらえられ、正当化されていったと思われる。

そしてこれら漢籍の記述がさし示すことがらを総じていえば、諫言とは「忠臣」の行いであり、それを認めることが「明君」の条件だということである。さらに言えば、「諫」の問題は、それを聞き、正しく理解できるかという君主の能力の問題だということである。ここにおいて、藤原万里の詩が最終的に天皇に対する問いかけという志向性を有していることの理由が説明できよう。

つまり、儒教の理念から見たときに、高市麻呂失脚の問題は高市麻呂個人の問題ではなく、天皇のあり方を問う問題となるのである。

四 文武朝の精神史

『懷風藻』の序文は歴代の代表的漢詩人として、大津皇子・文武天皇・大神高市麻呂・藤原不比等の四人の名を挙げている。他の三人の位階の高さや詩作品の数の多さに較べて、藻中にただ一首だけを残す高市麻呂がここに挙げられているのは奇妙である。またこの四人のうち大津皇子以外の三人は同時代人であり、直接的な交渉があったと考えられる。不比等はいわば文武天皇のブレンであり、そして高市麻呂は文武天皇によって再評価され復権した人物である。高市麻呂の名がここに挙げられていることの理由には、文武天皇との関りということが大きなものとしてあるのではないだろうか。⁽¹⁷⁾

『懷風藻』編者の近江朝志向ということはよく言われるところであるが、それに加えてこの序文の人選からは文武朝志向ということも言えるだろう。漢詩文を中心におく文学史認識からすれば、天智朝と文武朝こそ聖代として仰がれるべき御代であった。

文武朝、といっても、その前半と後半とでは質的な差異があり、大宝建元以降、とくに文化政策面において大きく質的転換が図られていることについては、既に指摘がなされている通りである。⁽¹⁸⁾大宝元年という年は、中国風の壮麗な元日朝賀の儀（二月一日）にはじまり、約三十年ぶりの遣唐使の決定・任命（二月二十三日）、そして新元号「大宝」建元（三月二十一日）と官位制の改制（同日）など、大宝律令撰定（八月三日）に伴う諸制度の改革が次々と断行されていった年であった。翌大宝二年の元日には礼服が初

めて用いられ、宮中公宴で唐楽が演奏（二月十五日）される。このような状況のなか、大神高市麻呂は政界に復帰（二月十七日）し、その同じ年の暮れには彼を失脚させた張本人であった持統天皇がこの世を去っている（十二月二十二日）。このように大宝年間という時期は律令制の導入を軸とする新しい政治体制が発出した時期であったわけだが、その新体制の特質は、全て徹底した「文化の中国化」にあることができる。ここにおいて文武朝は近江朝以来の漢風讀美の時代を迎えることになった。『懷風藻』に収められた侍宴応詔詩や七夕詩が大宝元年あたりを境にして量産傾向に入つてゆくという指摘もあり、政治・社会・文化の中国化の風潮のなかで漢詩文の創作も隆盛を迎えることになったと考えられる。これより半世紀後の『懷風藻』成立の頃には、文武朝が漢詩文の黄金時代として回顧の対象となつていたわけだが、文武天皇が『懷風藻』における唯一の天皇作家であることからわかるように、この時代は天皇自ら「小帝国の皇帝にふさわしい文化」を積極的に求めるような時代状況があつたのである。

高市麻呂の復権という事態の中心人物は文武天皇である。その文武天皇は藻中に三首の漢詩を残しているが、その中で自身の天皇観とでもいふべきものを披瀝していると見られる「述懷」詩をとり上げてみよう。

「述懷」 文武天皇

年雖足戴冕 年は冕を戴くに足れりと雖も

智不敢垂裳 智は敢へて裳を垂れず

朕常夙夜念 朕常に夙夜に念へらく

何以拙心匡 何を以ちてか拙心を匡さむ

猶不師往古 猶往古を師とせずは

何救元首望 何ぞ元首の望を救はむと

然母三絶務 然すがに三絶の務母し

且欲臨短章 且く短章に臨まむとす (懷一六)

この詩で文武天皇は自らの「智」が足りないことと述べ、また「拙心」を正す必要があると述べている。自身について理想の「元首」としてはまだ不完全であると述懐するというきわめて謙虚な姿勢といい、また「往古」を師とするという発想といい、この詩にうかがえる文武天皇の天皇観は、儒教的天子観であるといつてよいであろう。十五歳で即位し、二十五歳で世を去ったこの若き天皇は、おそらく幼少期より漢籍に傾倒し、骨の髄まで儒教理念を身に染みつけた天皇だったのではないかということをして、この「述懐」詩は想像させる。

文武天皇をそのような儒教的天子観をもった天皇に育て上げたのはおそらく藤原不比等やその周辺の人々の意図によるものであったと思われるが、そうした文武周辺の官人たちと、文武天皇自身とがともに望んでいたことは、天皇が「小帝国の皇帝」となることと、それと同時に、天皇が有徳の「天子」になることであったと考えられる。文武の「述懐」詩や、大宝年間の諸政策のあり方は、文武天皇が「天子」たるべく、かつ「皇帝」たるべくふるまおうとしたことのあらわれであったと見られるが、大神高市麻呂の復権という決断も、そうした理念の一環においてとらえるべきであろうと思われる。

先述した通り、儒教的理念にあつては諫言は正当化されるべきものとしてあり、それを聞き入れることのできる者が「明君」であり、それを聞き入れることのできない者は「闇君」であると考えられていた。文武天皇は自らを儒教的「明君」たるべく位置づけるために、諫言を行った者を「忠臣」として評価する必要があつたのである。高市麻呂を再評価し政界に復帰させることは、文武天皇が聖天子となるためのお膳立てのひとつであつたと見るべきである。

高市麻呂を「忠臣」として再評価することは、当然持統天皇を「闇君」視することになり、その治世を失当として批判するということにもなりかねないが、たとえ過去を否定することになつても、文武天皇を「明君」として讃美しようという流れが形成されつつあつたのだらう。そこに「文武派」対「持統派」という対立があつたとまでは確言できないにもせよ、壬申の乱から三十年を経て、世代交替が行われたということはあるだらう。高市麻呂は旧世代の人間であるが、新世代の人間によつて再び表舞台へと引き出された。高市麻呂復権と相前後して持統太上天皇が世を去っているが、それに象徴されるように持統朝の政治体制のもつ影響力は低下していつたのであらう。文武朝が新体制として顕揚されるためには、持統朝は過去のものとして清算されなければならなかつた。むろん、律令的Ⅱ中国的文化政策は文武・持統朝の段階から既に構想されてきたものであり、そこには連続性が認められこそすれ、本質的な断絶があるわけではない。むしろ「断絶」は演出されたものであり、後代の解釈によつて形成されたも

のであるだろう。高市麻呂はそのために利用されたのであり、彼をめぐる処遇の差異がふたつの治世の懸隔を象徴するものとして了解されていったのであろう。

天武・持統朝における中国文化の摂取が可視的な制度の面に限られていたのに対し、文武朝以降の受容はより内面的・精神的なものとなっていたとは言えないだろうか。儒教思想は単なる外来の新知識のひとつではなく、政治理念そして倫理的規範として官人たちに内面化されていった。そのことは『武智麻呂伝』（「家伝」下）や『続日本紀』の記述に具体的に辿れるが、先に見た『懷風藻』の言説もそのような文脈において理解すべきであろうし、そもそも高市麻呂の諫止事件を伝える『日本書紀』自体が元正天皇の養老四（七二〇）年に撰上されたものであつて、その記述も奈良朝の言説のひとつとして理解すべきである。とくに持統紀の記事は大宝二年の持統崩御の直後から編述されはじめた蓋然性が高いだろう。また『万葉集』巻一には人麻呂「留京三首」を含む持統六年伊勢行幸歌群（一四〇一四四）があるが、その左注に持統紀の高市麻呂諫争の記事が引かれている。この左注は歌に対する批評および再解釈——たとえば「留京」を高市麻呂への賛意とするような——を意図して記されたものと見ることができ、この左注もまた奈良朝の言説のひとつと考えられる。

このように高市麻呂を語る言説のすべては文武朝・大宝年間以後、奈良朝にかけて形成されたものであり、そこには共通する理念があらわれている。高市麻呂の失脚と復権という事件は、高市麻呂個人の思惑や実人生を超えて、すぐれて思想的な意味づけを

与えられて言説化されていったのである。高市麻呂の「復権」とは、実は時代の言説と思想における新たな解釈そのものであった。高市麻呂をめぐる言説Ⅱ文学は時代の精神に要請されて成立した歴史的な所産として統一的に把握されなければならない。

注(1) 『日本古典文学大辞典 第一巻』（岩波書店・昭59）四六〇頁

「大神高市麻呂」（神野志隆光）の項目。

(2) 坂本太郎「大神氏と万葉集」『古典と歴史』（吉川弘文館・昭47）。

(3) 日本古典文学大系5『萬葉集 二』（岩波書店・昭34）三九九頁
頭注七。

(4) 山田英雄「散位の研究」『日本古代史攷』（岩波書店・昭62）。

(5) 古賀精一「大神朝臣高市麻呂考」『石井庄司博士
喜寿記念論集 上代文学研究』（塙
書房・昭53）。

(6) 福田俊昭「懷風藻の応詔詩」（大東文化大学『日本文学研究』22
号、昭58・1）。

(7) 川崎庸之「記紀万葉の世界」（御茶の水書房・昭27）二〇七頁。

(8) 横田健一「白鳳天平の世界」（創元社・昭48）二二六頁。

(9) 小野泰央「平安朝の公宴詩における述懐について」（『国語と国文学』平9・9）。

(10) 小野氏注9論文。

(11) 古賀氏注5論文、福田氏注6論文。

(12) 林古溪「懷風藻新註」（明治書院・昭33）六五頁。

(13) 長野一雄「警戒の儒教意識と大神高市万呂伝の形成」『古代説話
の文学的研究』（井関書店・昭61）など。

(14) 守屋俊彦「上巻第二十五縁考」『日本霊異記の研究』（三弥井書
店・昭40）。田村圓澄「天照大神と大三輪神」『伊勢神宮の成立』
（吉川弘文館・平8）など。

(15) 参照、直木孝次郎「持統天皇」（人物叢書、吉川弘文館・昭35）
二二六―二七頁。佐藤美知子「持統天皇行幸閑歌の背景」（『大谷文

新刊紹介

野村敏夫著

『言葉と心が響き合う表現指導 ——主体交響の国語教育』

著者は、都立高校の教諭から、文部省国語課の国語調査官に転じた人。かつて勤務した二橋高校において、三年間持ち上がりで担任した学年の授業記録をベースに、そこから得られた「主体交響」の概念を述べる。短歌・俳句の創作を織り込んでいく点は独創的で、真摯な授業実践の記録と評することもできよう。現役の教員のみならず、国

子大國文」10号、昭55・3。原秀三郎「古代国家形成期の東海地域と大和王権」(報告書「東海地方の前近代交通形態と地域構造の特質に関する基礎的研究」静岡大学、昭61・3。など。

(16) 辰巳正明「万葉集と中国文学」笠間書院・昭62 八七頁。

(17) この四人の人選については、本稿とは異なる視点からの、波戸岡旭氏の見解がある(『上代漢詩文と中国文学』笠間書院・平1、十一頁以下)。波戸岡氏は高市麻呂を大津皇子とともに「悲運の詩人」としてとらえ、そこに編者の文学観を読みとる。

(18) 中西進「大宝二年」『万葉史の研究』(校楓社・昭43。川副武胤「大宝元年」(『山形大学紀要(人文科学)』9巻3号、昭55・1)。

など。

(19) 井美充史「文武朝の侍宴応詔詩」(『国文学研究』百十五集、平7・3)。月野文子「懷風藻」(『古代文学講座9 歌謡』勉誠社・平8)。

(20) 井美氏注19論文。

(21) 直木氏注15書、二五八頁以下。

(付記) 本稿は平成十年度上代文学会大会(於常葉学園短期大学)における口頭発表を基にしている。

語教員をめざす学生諸君や、国語教育に関心をもつ人々に、広く一読を薦めたい一冊である。

(平11・3 大修館書店 B5判 二七五頁 二二〇〇円) (兼築信行)

平安末期百首和歌研究会

(代表井上宗雄) 編

『為忠家両度百首 校本と研究』

丹後守為忠朝臣家百首・木工権頭為忠朝臣家百首の、両度の為忠家百首の校本を提示する。I校本篇は、尊経閣文庫を底本とし、

彰考本以下十一本で対校、校異を示す。II研究篇では、諸本・諸本の概略・作者・成立・参考文献に分ち、基本的な事項が記述される。III索引篇は、初二句索引だが、初句に異文がある場合も採られている。同研究会の刊行書は『久安百首 校本と研究』(一九九一年八月 笠間書院)以来二冊目。本書の作成に当たったメンバーは、代表井上宗雄の立教大学における教え子を中心だが、本学会会員の浅田徹・上野順子が参加している。

(平11・2 笠間書院 A5判 三四二頁 八五〇〇円) [兼築信行]